会議議事録

|  |  |
| --- | --- |
| 事業名 | 令和５年度「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」事業  （２）教職員の資質能力向上の推進① 効果的な教育成果の公開方法等に関する支援体制づくりの推進 |
| 代表校 | 一般社団法人全国専門学校教育研究会 |

|  |  |
| --- | --- |
| 会議名 | 第5回専門学校教員概論研修プログラム開発委員会 |
| 開催日時 | 令和6年2月22日（木）15:00～17:00 |
| 場所 | 学校法人麻生塾　10号館 |
| 出席者 | 事業責任者：岡村　慎一、成底　敏（OL）　　　　　　　計2名  委　　　員：植上　一希、松田　義弘、佐藤　昭宏（OL）、  丹田　桂太、水田　真理（OL）、小田　茜、  小田　政江　　　　　　　　　　　　　　　計7名  請負業者　：飯塚　正成　　　　　　　　　　　　　　　計1名  　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合計10名 |
| 議題等 | １．はじめに・本日の目的（植上）  今日は、今年度の開発委員会の最終回になる。今回の委員会の目的は今年度の成果物について、確認をしていくことになる。成果物については、2点。1点目は調査の報告書、2つ目が専門学校教員概論のテキストのたたき台、方向性。それぞれ前回の委員会から研究者ミーティングを行って、担当者ごとに前回もらった意見をもとに作ってきたので、それぞれ報告をしてもらって、委員の先生方の意見を確認する形で今回は終わっていきたいと思う。順番としては、まず報告書について、丹田さんと小田（茜）さんにまとめてもらったので、そちらの方の説明をしてもらって、皆さんから意見をもらう、その後に佐藤（昭）さんの方からテキストについて、ということでお願いしたいと思う。  ２．調査の報告書について（小田（茜）、丹田）  資料「20240217\_専門学校教員概論研修プログラム開発委員会2023年度報告書\_統合版」をもとに説明（小田（茜））  〇補足  →このような形で調査に関する報告書を作成している。繰り返しになるが、今年度、専門学校の関連団体ということで、TCE財団と福専各、そして5つの専門学校・学院にお願いしているというところで、各団体の報告をそれぞれ項目ごとにまとめた上で、小田さんから説明してもらったように、全体的な課題、特に今回、我々の委員会の目的に沿った形での調査のまとめとして、大きく3点に分けて考察している。これらについて、まとめ方やまとめた上で来年度のさらなる調査、またこういった調査をどのようにプログラムに反映させていくかについて意見をもらえればと思う。（植上）  ---------------------意見交流等  →1つは、専門学校教員というところにフォーカスしたキャリア形成というのは、今まであまり見たことないので、とても有意義だなというのが1つ。その中で、新任の教員研修としてのベースとなる教材を開発するというところで、思いつくところで言うと東専各が作られているものと川口先生のところがやっている星槎大学のものがあって、この2つと、どこがどう違うのか、というところを、相手をどうとか言うのではなくて、少し表現しておいた方がいいのかなという気はする。もちろんキャリア形成というところを特筆しているというのは1番の優位性だと私は思っているが、でも大多数の専門学校のオーナー、上層部の人たちはそこをあまり考えていないから、現状に繋がっているというのは、正直私も感じているので、そういう意味でこの教材の優位性をどう伝えることができるかということは、入れていくといいのかなと思っている。それは、専門学校だけではなうて、企業全体としてそういったトレンドに流れているのに、専門学校の業界そのものが、人材育成ということを、学生にはしているけれども、自分たちがしていないんだということに気づいてほしい、というのはすごく思う。あとは、これはオンラインでということで進めていくが、手法として最終的にキャリア開発というか、自身の自己理解の促進とかになっていくときに、セルフワークと、他者理解からいく自己理解みたいなところが起こると思う。それをどのように工夫するかというところが、手法の中で今後の課題になるかなと思う。オンラインでも十分とみんな言うが、うちが去年やっていたのがあまりうまくいっていないなと正直思っているので、必要かなと、感想だが。（岡村）  →岡村先生からは2点の意見をもらったが、まず1点目が他の新任教員等に関する教育プログラムとの、今回はTCE財団というところで見てきたわけだが、川口先生が作っているもの、東専各が作っているものとの比較を通じて、私たちが今作ろうとしてるプログラムのオリジナリティ、必要性などを訴えていく必要があるということは本当にその通りだなと思う。これは、来年度、調査の一環に入れていいかなと思うので、メモしておきたいと思う。そして2点目は、これは来年度の開発の仕方ということだと思うが、教育方法、授業方法ということで、今意見をもらったところだと思う。これは次の佐藤（昭）さんに報告してもらう内容とも関係すると思うが、やはりキャリア意識みたいなところに注目していく、そしてその際には自分自身の意識に加えて、他者との関係での循環的な意識の創生みたいなところも必要になってくるという岡村先生の提起はその通りだと思うので、その辺りも開発にあたって入れ込んでいきたいと思うし、また次年度、実際にやっていくにあたってどのような教育の在り方、みたいなところも先生方から意見をもらえればと思う。（植上）  →　TCE財団との比較は、中心的に、自覚的に書いていたが、確かに他の新任教員プログラムとの比較というところは、十分に検討できていなかったので、そこは書けるようにしていきたいと思う。学生の人材育成と教員の人材育成の現状の話も、勉強になった。（小田（茜））  →本当に企業のトレンドになっている。新任研修はどちらかというとやる気を出させていくとか、マインドセットしていくとか。（植上）  →リカレントとか、リスキリングという言葉が出てきている背景にそこがあるということをあまり皆さん理解していないから、そこに気づかないと、専門学校の業界だぞ、業界人育成するのにどうするの、って私は思っている、ちょっと鈍感。（岡村）  →私もこの間、職業的な継続をどのように図っていくかというところでいろいろと文献を見ていくと、医療・介護系と教育系が多くなっていて、要するに続かないからって、先生たちもすぐやめるし。そういったところで、研修の課題として出されているのは、今、岡村先生に言ってもらったように、職業意識とか職業観みたいなことをどのように上げていくか、また、職業的アイデンティティみたいな言葉も使われていたりするが、その辺をどのように彼ら自身に持たせていくのか、というところが課題だとかなり言われているのかなと思う。そういった観点で研修も、特に医療系、看護系で作られているので、そういったところをかなり参考にしながら、むしろそういった業界ではやられている、ということを引きながらやっていくこともすごく大事な説得材料になるかなと思った。だから、岡村先生が言うように、他の業界でやられていることが、こうですよ、というのも1つの説得材料になるかなと思うので、その辺り研究的にも私も関心があるので、見ていきたいと思う。ついでに言うと、面白かったのは、看護師とか介護職とかっていう医療系は、参入する前、専門職になる前もガンガンガンガン職業的アイデンティティの教育をしているにも関わらず、離職しちゃう問題があって、参入前だけじゃ足りないんだよという話を結構している研究が多いが、そういった論文を読むと、専門学校はそもそも養成課程がない状況で入ってきている先生たちが多いことを考えるとより説得力がある内容として、職業的アイデンティティを付与していくことは大事なのではないかと思っているので、この辺り理論的な整理も含めてやっていきたいと私も考えているところ。（植上）→  新任教員というところでも、岡村からうちでうまく行っていないという話もあったが、今回初めてフォローアップのアンケートをとってみて、これには新任の方も含まれていたが、新任先生方はやる気があって、他の人のアンケートに比べてとてもたくさん答えられていたので、そのフォローアップアンケートをどの段階でやっていくかとか、今後、設計していく上で考える必要があると思う。それと、それをするよ、という予告をしておかないと、やはり忘れたとか、っていう感想も多くなっていたので、あと6か月にとったものはかなり忘れた比率が高くて、2ヶ月後にとったものについては、やっぱり覚えている、業務に活かしているというフィードバックが多かったので。それそ、それを今は人力でやっているが、教育システムとして開発できれば1番いいのかなと。（小田（政））  →今の話すごく大事だなと思っていて、研修の成果を継続的に見ていくというところ、学校・学園が主体の場合は、いわば自分の職員にやるというのが1つの方法になるかなと思うが、例えば全専研でやるとか、TCE財団、福専各でやる場合の研修の成果の追い方というのは、すごく大事だなと思いつつ、どうすればいいのかなというのは話を聞きながら思ったところで、でもそういったことも頭に入れながら、やれるとすごくいいと思う。やった内容を上司に1度報告するということも、もしかしたら大事かもしれない。（植上）  →前回参加できていないが、非常に良いものが出来上がりそうだと感じている。おそらく来年、計画の話が植上先生からあったように、具体的な作り込みをしていく上での追加調査と、内容面の作り込みという流れになっていくと思うが、私からの視点で、3年経った時に、良いものが完成しました、となったときに、これをどう活用していくか、というゴールイメージを想定しながら、作るというのも、もしかしたら観点としてあってもいいのかなと。今回の調査結果からもあったが、1つは私はよくわからなくて、岡村先生が知っているかもしれないが、TCE財団が全国の展開している各都道府県で実施している新任研修のプログラム、先ほどの報告書の中でもTCE財団のコメントの中で、少し古くなっているというような表現が出てきていたときに、改めてそこに今回作った教材が標準的に盛り込むことが可能なのかということが1つ。もう1つは、この事業のテーマでもあるが、各都道府県の専各で実施ができている県はまだやっている方。それができていない県の専門学校が、この事業でいい教材ができたものを活用できるような形を来年以降の落としどころとして考えてみてもいいのかなと思う。例えばだが、今回の教材を使った動画、この動画を見せることでこの教材の受講ができるというような形で、何か最後落とし込むのかというところ。1つ考えると、今回、足りていないという現状、実施ができていないという現状があったので、今、実施ができていない学校がこの事業でできる教材をどうすれば活用できるのかみたいなところのゴールイメージ、落としどころをイメージして、逆算してそれをテキスト教材の作り込みの際に頭の片隅に入れながら、作っていくという姿勢もあってもいいかなと感じる。非常にいいものができそうなので、せっかくできたけど誰も使わないということになるのはもったいないなと思ったので、その辺りもイメージしながら作り込みしていくといいのではないかと感じた。（成底）  →ありがとうございます。成果物の展開、作った後の展開について考えた方がいいという意見。特に、2年目、3年目の作っていく段階から、完成後の展開を考えながら作るべきという意見は、本当にその通りだなと思う。この辺り、前回の委員会でも少し話題になった部分でもあるが、改めて、岡村先生からこの点について、成底先生が言っていたTCE財団について情報共有があればと思うが。（植上）  →19日にTCE財団の菊田参与と原田さんと話をしている。要点は、今、TCE財団の方が文科省の補助事業として新任教員研修の全国展開をしている、都道府県に委託をして、というか、運用をお願いして48時間をやっていると、それが先ほど成底さんがいった13都道府県ということ。修了証を出してはいるが、法的根拠はない。修了証があるからというのは、箔付きくらいの気持ちくらいしか現実的にはない。ただ、定額で受講料の半額近くは文科省の補助でやっていますということで勘弁できるということでやっているが、内容的に都道府県任せのところが、パート毎、科目毎にあって、陳腐化している、遅い、古いのではないかと、昔の教員養成でやっていたことをなぞらえているところがあって、今どきのことがないのではという考え方もあるし、もう1つは、48時間も受けられる学校がどれくらいあるのかということも、正直、現実的な問題としてあって、これを全国展開していくというのは、13都道府県を47都道府県にするのは限りなく難しいだろうというのは、財団の考え。だから、これとは別に、新任研修というものを抜本的に全国の専門学校に提供できるものを考えていかないといけないのではないかというのは、文科省が今言っているところ。ただ、それを明快にこうしよう、という答えを財団も出せていない中で、今、今回、うちの文科省事業としてやっているこの新任教員研修プログラムがどこまで全国展開に対応できるかというところが、1つある。先ほど私が言った他のところも、そのような提案のもとやっているが、方や120時間とか、方や大学寄りの明らかに学問的なものを伝えているだけで、専門学校教員がこれを聞いてどれだけためになるのかなというのが、個人的な感想のところでもあったりする。なので、60時間とか120時間を全部やる、というのではない、新たなものをこちらで提供して、菊田さんの方から言うと、それぞれ違った先生がいっぱいいるんだから、一律に全部しろというのは無意味じゃないの、と。ただ、コアになるものは、我々としては、キャリア形成というものがあるが、それぞれの能力があるから、それはちょっとモジュールで我々はいろいろ開発して、提供するから、それをみんなで受講できるようにしましょう、という話を今しているところ。つらつらと言ったが、この教員養成課程のプログラムについては、財団としても出来上がったところで、財団としてこれを紹介していくことには、やぶさかではないと。じわりじわり浸透していって、普及していけば、オーソライズされていくことを期待してもいいのではないか、ということは言っているし、私も文科省の方に言っていきたいなと、全国でこれだけやっていますよと、13ではなくて、30都道府県がやってますよというようなことを言えるようになるといいなと思ってはいる。ちょっと財団はぶっちゃけ、以前このようなものを作ろうとして、損失を出した経験が、苦い経験がつい最近あるので、これをやれる人を中でも作りづらいというのが、今の財団の状況ではないかなと思っている。（岡村）  →今、今後の成果物の方向性について、岡村先生からTCE財団とのやりとりについて、共有してもらった。（植上）  →委員会の事業の目的自体は、教材の完成までがこの授業の目的ではあるので、その後については、そんなに議論する必要はあるのかなと思ってはいたが、ただその後どのように活用されるかなということをイメージして、作るという視点があってもいいかなということでの発現だった。（成底）  →本当にせっかく作ったプログラムが活用されないのはもったいないし、やはり他の文科省の委託事業でもそういった事例はたくさんあるのかなという気がするので、そうはならないように、ということで。そして、そうなると活用の汎用性みたいなものの確保とか、活用の仕方、そのしやすさみたいなことにも注意しながら、でもやはり質が高いもの、そしてニーズに合うものが1番だと思うので、このあたりを注意しながら作っていければと思う。（植上）  →テキストができて、実施するときの講師は、どういった人を想定しているのか気になった、まだ先のことかもしれないが、今の話の中で素朴な疑問として、もしかしたら関係ないかもしれないが。（松田）  →多分、植上さんの中では、私が勝手に思っているのは、読めばわかることは知識部分として、わかるようなテキストにしたいという思いがあると思う。でも、読むだけじゃわからない自分自身のことを考える時間とかは、それなりに時間をとって、自分が内省をして、他者にアウトプットして、他者のものをアウトプットしながら、自分のもの築いていくというような、そのような時間は別途作る必要があるんだろうなというイメージは持っている。別途時間を作っていくみたいなイメージかなと思う。（岡村）  →これは来年の頭あたりに最終的なプログラムの形を先生方と一致させないといけないと思うが、間違いなく確実に作りたいのはテキストを作りたくて、これはマストで作りたいと思っている。前年度はパワポを中心に作っていて、これは前回の委員会でも話したが、パワポはもちろん作るが、それだけではなくて、むしろテキストをしっかり作っていくということを中心にしたいと思う。テキストを作ることによって、先ほど岡村先生にも言ってもらったし、小田（茜）さんの報告にもあったように、そのテキストを読めば何となくわかる、テキストだけで十分かというと、他の先生方が言うように十分ではないが、少なくともテキストという形で届けていきたいというのが大前提かなと思う。ただ、当然、先生が言うように、研修として作っていくということがもう1つ役割になるので、テキスト＋研修というような形になっていくかなと思う。第1段階は、やはりここにいるメンバーが講師になっていく、ということがイメージになるかなと思っている。それは、研究者メンバーだけではなく、松田先生や小田先生も含めてということになるが、そういったことがイメージになるかなと思う。その際に、多分、重要になってくるのが、テキストを作るだけではなく、テキストのサブ本、副読本みたいなことが作れるといいかなと思うが、ちょっとそこまで余裕があるかどうかはわからないなと思う。ただ、前回も話したように、テキストを作っていく過程が大事だと思っていて、研修をしながらテキストを作っていく過程で、副読本的な要素が、かなりメモで集まってくるだろうなと思っている。その要素をしっかりとやっておくと、副読本のようなものに近づくようなものはできるのではないかなと思っている。最低限、ここにいるメンバー、本当に最低限、ここにいる研究者メンバーは講師になっていくと。で、それを広めていく過程で、副読本とかが広がって、ある程度の方々が、特に専門学校の先生方が、管理職の先生方もこの教科書を使って、各学校とか各地域でできればベストかなというのは、野望としてはあるが、そこまでどのように至るのか、それがこの2年間でできるのかというと、そこまではいかないかなと思うので、最低限、このメンバーは講師になりたいね、という感じ。（植上）  →イメージが湧いた。（松田）  →テキストはしっかり作っていきたいなと思うし、成底先生が言っていた動画に力を割くのか、その辺が来年度、先生方と相談かなと思う。予算のこととかもあると思うので。（植上）  →先ほどの副読本の話でいくと、結果的に、新任教員に対するという話だと思うが、市販されるといいな、と。というのは、なりたい人が先に手に取る、かつ、大学の先生です、というと、みんなステレオタイプでこんなキャラクターよね、と思われるような感じのものができるといいよなというのが、聞きながらの感想みたいになるが、外に出すとロールモデルもできるよなと、思っていた。（水田）  →それは本当に大事で、まだ確定していながら、科研費で予算が取れれば、出版計画とかも作っていきたいなと思っている。科研費で予算が出ると出版しやすくなるので、ただ、助成金がないと、今は本当に出版自体できないかなと思うので、その辺りで上手く作っていって、全専研との協力のもと、まずは安く配布できるような形で作れるとベストかなと思っているが、まずは科研費を取らないとかなと。（植上）  →内容的なところは特にないが、1番最後の調査のまとめのところをポンチ絵的なものを作っておいた方がいいかなと思っている、見てわかるものがあると、説明しやすい、文科省が。それから、これから先の、成底さんが言っていた部分ではないが、活用する過程にいくときに、僕が知っている範疇で、他のものは大学がベースになって、それをカスタマイズしたものなので、ものすごく強くオリジナルのものであることと、専門学校教員の専門のものであるということを前に出した方がいいのかなと思っていた。  →ポンチ絵については、丹田さんにお願いしたい。まとめについて、第1に、第2に、第3に、の質的と量的の図を作ればいいと思う。来年、川口さんのところのものとかとの対比図みたいなことが作れるといい。（植上）  →それがあるといいと思う。（飯塚）  →それと合わせて、新任教員がこれから如何に学び続けていくかというときの能力、スキル、ニーズは何であるかというマッピングがあると、こういうの志向したい、例えばアクティブラーニングやりたい、という時に、どういうところを自分は身につければいいのかとか、まだ教授法そのものがいまいちわかっていない、といったときには、何を学べばいいかとか、そういったものがあるといいなと。その根っこに、キャリア形成というところに自分の軸があって、それを維持していくためには、自分が如何にいろいろなものを学び続けていくかという絵が描けるといいなといつも思っている。教員養成はいろいろな科目があるわけだが、それがない、教育方法論とか、教育なんとかとか。（岡村）  →ポンチ絵については、報告書の最後のところに付け加えてもらえればいいかなと思う。締め切りはいつまでか。（植上）  →今すぐにというか、来年度でもいいと思う。ここから先、戦略的に、例えば48研修に入れ込もうとなったときに、見せられると、読んでというよりはわかりやすいかなと。（飯塚）  →今回の調査の結果として明らかになったのは、48研修は現実的に、現状としてなかなか壁があってできないから、改めて我々は新たなものを提供していくという姿勢を文科省に提案していった方がいいと思う。文科省もそれを望んでいると思う。いくらやっても48研修はこのままではできないから、これをできるようにするというよりも、菊田さんもそうだが、新しいものを作った方がいいよねという考え方だと思う。（岡村）  →図は、今年度は作らなくていいということでいいか。（小田（茜））  →今年度は良いかもしれないが、今もらった意見をメモしておいてもらって、来年度は文科省といろいろとやり取りしていく過程が入っていくので、図を作った方がいいというアドバイスになるし、川口さんとか東専各とかTCE財団との比較がパッとわかりやすいものができるといいと思う。ただ、川口さんのところはマニアック過ぎて意味わからない。（植上）  →それはもう小田（政）さんも受けているからわかると思う。（岡村）  →終了した。（小田（政））  →報告書については、細かい誤字があったので、修正してあげ直す。（小田（茜））  ３．テキストのたたき台、方向性（佐藤）  資料「『専門学校教員概論』テキスト開発の方向性について」をもとに説明（佐藤）  〇補足  →専門学校教員概論のテキストの開発についても前回の委員会で様々な意見をもらった。その意見に基づいて、研究者ミーティングで話し合いをして、先ほど佐藤（昭）さんから説明してもらったような形で対象、方法、内容について、ポイントをまとめる形で今回の報告に変えさせてもらっている。取りまとめの仕方や来年度の展開について、意見をもらえればと思う。（植上）  --------------------意見交流  →内容を事前に見ていたが、私が先ほど話したその後のイメージについてもこちらで入っていたので、大枠この方向でいいのではないかと感じている。（成底）  →ありがとうございます。来年はより具体的に執筆がスタートしていって、ワークの仕方などもスタートしていくので、そこでより具体的な意見を、成底先生をはじめ先生方からもらえればと思う。全体の方向性、ご了承いただけたということで。（植上）  ○補足  →テキストの案を作るプロセスの中で考えていたのは、教育専門性、職業専門性というところの課題感など調査から得られたことを、いかに言語化していくかというところが1番感じているので、第6章のところは、特にこれまでの調査とのリンクは結構あるのかなと言う気がしている。（小田（茜））  →補足すると、第5章と第6章のところ、佐藤（昭）さんには文章で触れてもらっているが、学び方、専門学校教員が自身でキャリア形成していく上での学び方と耐え方というかレジリエンス、そういったところに触れていくということが、佐藤（昭）さんに書いてもらっているところかなと思う。要するにいろいろな業務があって、それに必要なスキルとか知識がある。そして、そういったものをどのように学んでいけばいいのかとか、そういったところである種キャリアのしんどさも含めて耐えていけばいいのかということも含めて考えてもらうようなことも、5章、6章には含まれているのかなと思っているので、佐藤（昭）さんの資料にも書かれてはいるが、補足として。（植上）  →もう1点、第4章の専門学校教員のアイデンティティのところで、特にここが、こちらとしても質問していくのが難しかったし、答えてもらうのも難しかったところかなと、調査をしながら感じていたので、それこそキャリアパスを見せていくということともつながるし、来年は追加調査でここがもう少しうまく言語化できるといいかなと思っている。（小田（茜））  →内容については、既に研究者ミーティングですり合わせをしているので、意見はない。今回、TCE財団が行っている総合自由科目の8時間を想定して作って、そこが1番導入しやすいだろうという想定で8時間にしていると思うが、以前の会議で、本当にこれだけの内容が8時間、あるいはその短い時間でできるのかという議論もあったと思う。先ほどの岡村先生の話では、TCE財団が今行っている研修に盛り込んでいくという方向性自体は、ある程度、共通認識ができているかなと思うが、どの程度まで今やっている48時間の中の8時間以上に踏み込んで何かやっていくのか、その辺りのこともこちらでも見据えていく必要があるし、TCE財団や各専各にも追加調査等をして、その辺りのニーズについても聞きながら作っていく必要があるのかなと感じている。（丹田）  →小田（茜）さんが言ってくれたことを整理し損ねたが、「専門学校教員としてのアイデンティティは何ですか」という質問をしたところで、先方から返ってこないのは、ある意味当たり前だなと、今回インタビューをして思った。そのような言葉で専門学校の先生方は捉えていない、これはこっち側の問題かなと思う。ただ、やっぱり今回のインタビュー調査を含め、また三菱総研などがやっている調査を見ると、いろいろな形で先生たちの認識が変化していっていることは見て取れるかなと思った。例えば、三菱総研の調査で面白かったのは、卒業生との関係性が、ある意味、専門学校教員の離職率を下げる、自信みたいなものにつながっていくんだ、という数的データがあったり、それはやっぱり学生とか卒業生とのつながりの中で自分が専門学校教員になっていく、1つのプロセスなのかなと思う。そういった例えば学生とか卒業生との関係の中で自分の立ち位置が変わっていくということは、当然、専門学校教員のアイデンティティの1つの要素になっていくだろうと。それは授業然り、他の先生方との関係性然り、そして様々なスキルとか業務に対する自分の自信の持ちようとかも然り、ということになると思う。結局、「専門学校教員のアイデンティティ」という言葉を私たちなりに要素分解していって、分かりやすく伝えていくという作業が、むしろ4章で必要になってくるのかなと思う。だから、小田（茜）さんが言っていることはその通りで、もし必要があれば、その辺りをよりかみ砕いていく調査があってもいいのかなと思うが、もしかすると既存のデータを、二次的に検討していくだけでも、いろいろなヒントは出てくるかなと思うので、そういった形で4章を作っていくといいのかなと思う。だから、専門学校教員のアイデンティティというのを、むしろ私たちの方で指標を作って、分かりやすく展開していくという書き方かなと思う。佐藤（昭）さんもこの辺りのイメージは共有できているか。（植上）  →アイデンティティのところはすごく重要だという話が前回も議論になったかなと思う。教職アイデンティティの研究自体はわりと先行研究として蓄積があると思うが、先ほど冒頭のところでも飯塚さんが大学の先生や大学の内容をカスタマイズしたものはあるけど、専門学校の先生に特化した研修がないという話をしていたが、多分、アイデンティティ論も似たところがあって、義務教育段階の教職アイデンティティ研究は結構ある。そういった時に、専門学校教員ならではとなったときに、医療系は、看護科の先生など検索しても出てくるが、他の分野の先生のものが全く出てこないというのが、実際、学術研究から見ても研究の蓄積の浅さなのかなという気がするので、そこをどのように今回の研究を通じて、我々は今までも技能系の先生方を追っかけたりしているが、これまでの研究蓄積というか、植上先生とか皆さんとやってきた研究をどのように出していくのか、良い出し先にはなるのかなと個人的に思っているところがあるので、今回の事業の中で出していくというよりは、これまでの調査や研究で取得してきたものから、素材として使っていけるものはあるのかなという気が個人的にしているので、その辺りの議論が来年詰めていけるといいかなと思う。（佐藤（昭））  →今、佐藤（昭）さんが言ってくれたことで、本当にその通りだなと思っていて、先生方とも共有したいが、今、佐藤（昭）さんが言ったように、学校教員の分野ではアイデンティティ的な研究は結構されていると思う。この研究の要素も盛り込んでいきたいなと思いつつ、やっぱり専門学校教員が非常に特殊な職業的アイデンティティを持っている人たちかなと思っているので、その辺りを捉えていくアプローチが必要かなと。先ほど言ったような業界に入った卒業生と頻繁に会っていくということは、義務教育段階や高校教員はほとんどしていないし、大学教員も理系は結構するかもしれないが、文系の教員はそういった形でのアイデンティティ形成をほとんどしていない中で、専門学校教員は学校教員としても非常に特殊なことをしている要素があるのかなというのは、学校教員としての特殊性みたいなこともアプローチとして面白いなと思う。あと最近、研究で見たのが、違う業界から入ってきた人たちへのアイデンティティの付与をどうするかという研究があったときに、技能の移転とかを肯定していくというところ。前の業界で培った技能や経験を、次の業界でどのように彼らが転用しているのか、みたいなことを中心に研修しているようなものもあって、これって結構、専門学校の先生方は無自覚的にやっているのかなと思う。そんなに難しい話をここで展開するつもりはないが、そういった頭を持ちながら、専門学校教員がやっているある種のアイデンティティ形成を平易な形で見せていくということはやっていきたいと思っている。この辺りをいくつかテキスト書く過程で文字に起こしていかないとできないところなので、ここが少し苦労するところかなと思う。（植上）  →もう1個だけ、今の話に補足すると、今年度、丹田さんと植上先生と一緒に学会で発表した内容にも、むしろ小中学校の先生とは違う職業として捉えて、専門学校教員という職業に魅力を感じて、入職した方の声も出ていたと思うが、やっぱりそれは知識伝達の仕方がそもそも違うとか、今までの小中高で出会ってきた先生と、構えが違うというか、そういったところに魅力を感じて、専門学校教員になるという選択した人の声があって、それがマジョリティではなかったが、そういうところに魅力を感じて、だったらなっていいかなと思ってなっている人もいるわけで、そこはいわゆる教員の聖職論みたいなところとか、地方における職業威信がすごい高い中での先生という職業に憧れると言うルートとは、全く違うルートで先生になっているところとかは、すごくユニークだし、今の時代はすごくそっちに寄ってきているというか、そこが上手くアイデンティティのところとか、多様な先生になっていくモデル、はじめは先生になるぞ！と思ってなっているわけではないが、じわじわそこに魅力を感じて、先生と言うやりがいを感じていっているみたいなところが、新任の先生たちに伝えられるといいのではないかなと思った。詳細は来年詰めていくが、その辺りを知見として表現できるといいのではないかなと思う。（佐藤（昭））  →今の佐藤（昭）さんの話はまさにその通りで、最初は技術の伝達だけで入職してきたけど、ところがやっていくとそれだけではない、ということがわかってくる、わかってきて、そこに技術の転移とかが合わさって、専門学校の先生というものができてきているような気がする。私の経験からしてもそのような感じがする。そういうことで、初めて先生たちに自覚が生まれる、専門学校としての、「あ、こういう職業なんだ」とか、最初は技術伝達の側面だけで入職してくる方が多いのではないかなという気が、話を聞きながらしていた。（松田）  →内容はとても素晴らしいと思う。あとは、先ほどもお伝えしたように、新任の時に、いろいろな年齢層の新任の方がいると思うので、その方たちが、せっかくこれを1回やるなら、1年後、3年後にもう1回振り返ってチェックしてみようみたいなことがあってもいいかなと思う。あと年齢が高くなればなるほど、なかなかアイデンティティが変えられなかったりとかがあるので、そこを内省するポイントがあるといいなと、内省の仕方というか。（小田（政））  →確かに、そうだと思う。やはり年齢が高くなればなるほど、アイデンティティ変えづらいものか、一般的にはそうかなと思うが。（植上）  →どのようにキャリアパスを描くか、そのようなキャリア教育を、今の中高生はキャリア教育が浸透していると思うが、私たちの世代はそこがあまりなかったので、日々、そういう感覚で生きていない人が多いかもしれない、とにかく現場でやってきた、という。（小田（政））  →キャリアって連続性だから。だから、今、小田（政）さんが言うように、1年、3年、5年というふうに、自分で書いていけるようなものを提案する、提供していくというのが今の流れ。会社なんかでも、3年目研修、5年目研修とかやるのは普通なので、そういうのは必要だと思うし、今のアイデンティティが変わらないというか、変わっていることが無自覚だと思っていて、教育の専門性とか職業の専門性とか最後にまとめているが、これにもう1つ汎用的な能力が別にあって、それを社会人基礎力とかいろんな言い方するが、その部分があった上で、そのバランスをどう変えていくかということだし、多様性って今、小田（政）さんが言ったようにいろんな人がいて、経歴によって違う割合があるので、その割合はその人らしさだから、それがアイデンティティで、ただそこに専門学校教員の割合として今のバランスがどうなのか、というのをこちらの方がスケール出したときに、こういうのはあるよね、って、そういうアイデンティティの自我同一性みたいなところと言えるようなものがあると、「ああ、俺はこの枠から離れてはないけど、ちょっと足りないな」とか、それこそ先ほど言ったような可用性みたいなアダプタビリティがないと、これから情報系は無理だぞ、みたいな意識が見えるといいなと思う。初任者だから、今はこうだ、というのは自分のスケールで見てもらって、この枠の中に入っているけど、ここは不足しているみたいなものを自覚することがまずはアイデンティティの初期段階。やることは間違いなく専門学校教員だから、あなたはダメだよ、ではなくて、どこに過不足があるかを確認することが大事。そういうふうに思っているので、小田（政）さんが言うように、1年目はこうだったけど、3年目になったらこういうふうに変わっていた、というのが見えるのは大事だと思う。（岡村）  →今のお二人の話のところは、すごく面白くて、いろいろやりたくなるが、どうしようかなと思う。世代によって職業的アイデンティティそのものの考え方みたいなことの違う部分はあるはずで、それこそ50代、60代の方だと職業的アイデンティティというものをかなり固いものとして考えがちだし、1つのものとして、特にアイデンティティ全体の中での職業的アイデンティティが占める割合が大きく作られてきた世代であるのは間違いなくて、でも今の若い人たちっていうのは、そもそもアイデンティティ全体の中での職業的アイデンティティの割合ってすごく少ないし、実際に先生も言っていたように、アイデンティティそのものを柔らかく形成しないということを言われてきた、柔らかく、もしくは多元的なものとして、1つに凝り固まったらいけないよ、みたいな形であると、今、岡村先生が言ったように、使いすればいいものなのではないか、みたいな話はスッと通りやすいわけだが、やっぱり小田（政）先生が言ったように、どの世代に向けて、どの話をするのかというところで、結構、難しいのかなと。若い世代向けだとスッと通っていく、転職って当たり前だよとか、彼ら自身、アイデンティティの使い分けをかなりしまくっているので、例えば、SNS1つ取ったって、どのアカウントを使うかでアイデンティティの使い分けをしていると考えると、プラスのオプションとしてアイデンティティを付け加えていくことは、かなり自明のものだけど、世代が違ってくるとこの辺りは違ってくるのかなというのは、一般論としてあるのかなと思う。でも、やっぱり業界によっても違うし、アイデンティティの関与の仕方、それこそ医療系は若いころからガチガチにアイデンティティをそっち側に向けて投与していく形になっていったりすることを考えると、やっぱり違うのかもしれないなと思ったりする。（植上）  →分野も関連してくると思う。（松田）  →そう思う。（植上）  →多様だというところで、こうあるべきだというアイデンティティをここでまとめるのは無理があるし、すべきではない。（岡村）  →考え方みたいなことを、こっち側で、実際にテキストに落としていくときは難しいと思うが、でも今の主流のアイデンティティのモデルと、専門学校に合った形で、これは合っていると思う、転職型とかいろいろと柔軟なアイデンティティを作っていくべきだというところで合っていると思うので、今の小田（政）先生が言っていたアイデンティティの転換というところに迫っていければと思う。（植上）  →この研修受けたことで、「あ、ここにいていいんだ」とか、専門学校で自分が活躍する未来が描けるような形になると、希望があっていいなと思う。（小田（政））  →その辺、第3章の辺りが、多様なアイデンティティとか、多様なキャリア形成とかっていう言葉で出てきていて、ここにいくつかのモデルみたいなことを提示しながらやっていくと、ワークとして入っていきやすいかなと思っているが、ここも要検討かなと思う。佐藤さん、そのようなイメージか、今の引き受け方としては、3章になると思うけど。（植上）  →その辺りは、全部、盛り込む形で、今日もらった意見を素材にできればと思う。（佐藤（昭））  →48研修との関係性というのを、一度、方向性をちゃんとしておいた方がよくて、私の感覚は2つの選択肢があると思っている。要するに教育専門性という部分を新任のうちに学習しましょうというのが、48研修で今やられていて、今回の研修は48研修というか、教育専門性の1個のパーツだけをやろう、ということでTCE財団に売り込みに行くのか、それともTCE財団がやっているものとは別の48研修の体系像みたいなものを作ってしまって、うちがやるのはこれでやります、という方向性で、48研修とは全く違う48研修みたいなものを作ってしまって、その中の8時間にこれをあてよう、みたいな方向にするのかという2つは、今のうちに話をしておいた方が良くて、、、このチームで新任教員という全体像をどのようにして体系立てるかということを話し合ってもいいのかなと思う。現状として、教員として持つべきポテンシャルというか、概論、方法論、青年に対する心理みたいなところがあるが、もっと僕なんかに来るのは、実態に即したもの、例えばハラスメントへの対応とか。だから、新しいものを立てるのであれば、そこに一歩踏み込んで、ある程度形になったものを売っていくというのは、1つの考え方で、そこは方向性を整えたうえで、次年度以降にやるとより良くなるのではないかなと思う。現状としては、ものすごくいいエンジンがあるが、ハンドルがないからどっちに進んだらいいかわからないのと、誰かブレーキかけなきゃいけないのでは、というところがかからない状態に見える。（飯塚）  →今、考えた方がいいか。（植上）  →いやいや、今、ということではない。（飯塚）  →丁寧に学習したら、学習しましたよ、というのを出して、他愛もない修了証かもしれないけど、でもそういう人が結果として生き生きと専門学校で働いているよねというところの結果を、今日の最初のところにもあったように、我々が出していくと、あそこの教員研修いいよね、という話が出てくると、都道府県、あるいは専門学校が、じゃあうちのグループもこの教材を導入しようかとかって言ってくれるようになると、意見が強く言えるようになるのかなと思う。じゃあ、この次のバージョンとしてこのような能力段階のものを作って提供しましょうか、と言えるのかなという気がする。やっぱり専門学校って教育業界の中ではメジャーではないから、商売にならなくて、あまり出版社とかも作ろうとしない、やっと皆さんのおかげで研修者が気にしてくれるようにはなったけど、そうは言ってもというところはまだまだあるわけで、実績出すしかないと思う。飯塚さんが言うように、48時間ではもう無理なんだというのは、文科省もわかっていることなので、新しいもの使ってみたら意外とみんないいんですよ、というのを文科省に出していけばいいと思う。ただ、今気になるのは、単位制に今度、専門学校が動くというのが、今、一生懸命になって文科省しようとして、留年したときどうするかとか調査しているから、単位制になったときに、専門学校の先生が大学の先生みたいになる人が出てくるかもしれないなと思っている。単位で伝えればいいと。（岡村）  →学年生ではない、クラス制ではないということ。（植上）  →そうすると、我々の真骨頂である教育専門性のあるコアの部分が、ちょっと失われてしまう、あるいは分業化していかないといけないのかな、というのがちょっと私の見立て。それは逸れるが、いずれにしても、TCE財団の方との戦い方というか、調整の仕方は、良いものを出していって、東専各のものよりも都道府県での導入がしやすいというところも、訴求メリットは出して、早めにやりたいなと思う。売れるようになれば、出版をして、今、TCE財団で私たちが作った『未来ノート』というものを日本図書文化社が販売しているので、そういうこともあるので。（岡村）  →理想論の話には必ず時間軸がついて回らないといけなくて、そこに至るまでにどのくらいの時間があって、その時どのくらい専門学校がつぶれているか、という話になったときのシミュレーションとかを考えると、そんなに悠長な時間軸は持てないから、だから、僕なんかはここすごくいいチームなので、そこで仕掛けるということも考えとかないといけないのではないかと思う。本当に、現状の人口動態とかを見ていて、それこそ香川県の人口動態を見ていたが、留学生と言うか外国人がいないと県が成り立たなくなってしまっている。そういう感じの中で何人学生が来ましたというところになってしまうわけで、で学生も半分以上が留学生です、みたいないう都道府県が出てくる、和歌山県とか。で、専修学校がなくなった県もあるし、そういう状況になってしまっているので、あまり悠長に時間をかけてやっていくこともできないから、ITではよくやることだが、とりあえず作ってみて、やってみるというくらいなニュアンスの速度感がないと。（飯塚）  →仕込み、あと2年間で、完成したものを一気に導入する学校というかグループを一気に作って、それをやって、発表していくということだと思う。それをしないことには。（岡村）  →全専研のボリュームというのを明確にするというところで、小田（政）さんが言っていた1年、3年、5年ということを、全専研の全部の学校で、今年度から新たに雇う教員が何人いるのか、これが現状のMAXになる。それが、全体でいうとどれくらいの訴求効果があるのか、というところで、教員研修受けている人間がTCE財団の中で認定証を出しているのが受験者の数だから、その数との関係でどうなるかという話になると、すごく内容的に良いものを話し合っているから、これをどうやって、成底さんではないけど、表に出すかというところと、本当に時間軸は結構ギリギリでは。（飯塚）  →言ってもらっていることがわかってきたところ。飯塚さんが言っていること、本当にそうなんだなと思っているので、そういった形で知恵を貸してもらいながらやっていければと思う。（佐藤）  →今、話があった時間の喫緊性というのはものすごくあるだろうなと考えたときに、どうスケールしていくのかということになるので、テキストを執筆が終わってからということではなくて、同時並行で、そこをどう展開していくのかを考えながらやる必要があると感じて、今の話を聞いていた。そこは、また検討する。（佐藤（昭））  →2個あって、最初のアイデンティティの話は、うちの教員を見ていても、それは結構感じるというのが1個で、例えば卒業生の情報とかかなり詳しくて、経験を積むにつれて溜まっていくとか、この企業さんはどのような企業さんかというところの知見もかなり溜まっていくので、そういうところもアイデンティティとしてあるんだろうなというのを実感したというのが1つ。それと、時間軸の件は、私も結構、やばいなと思っていて、いろいろな人に言うのは、今年は2030年の先取りです、みたいな話をしていたりするので、18歳人口もこれから戻ってはくるが、2030年には今と同じくらいになるし、地域的な配分も変わってきているところがあるので、特に地方圏のところはかなり厳しくなるだろうなというところは、数字でも出ているので、その辺をどう反映させていくかというところは、あるかなと、具体的な案があるわけではないが、思った。（水田）  →テキストについても一通り先生方から意見をもらって、大きな変更というよりも、来年度に向けてたくさん意見をもらった。まずは、佐藤（昭）さん、この方向で完成させてもらって。（植上）  →今日の意見を、全部ではないが、部分的に修正してアップする。（佐藤（昭））  →小田（茜）さんと丹田さんの方で、誤字脱字も含めた書き直しと、佐藤（昭）さんの方で修正をしてもらって、Slackに提出する形になる。 |
| 配布資料 | ・第5回専門学校教員概論研修プログラム開発委員会資料  ・20240217\_専門学校教員概論研修プログラム開発委員会2023年度報告書\_統合版  ・『専門学校教員概論』テキスト開発の方向性について |

以上